

この文化祭の経験、プロジェクト長の経験がすごい今の仕事に生かされてるっていうか、今の仕事に就いたきっかけでもあるし、すごい思い出深いことでした

語り手 勝部光貴（高校七期生 広告代理店） 聞き手 榎優花

英語の授業の楽しさ

―学生時代好きだった教科はなんですか？

英語の授業が好きでした。日本語とは違う言語を通して人と繋がる瞬間が楽しかったし、今、立守だと、その他の公立高校とは違って、ネイティブの先生との授業だったり、海外研修とか留学生とかの交流とかもあったりして、英語を直に使う実践の場が多かったりしたから、すごくモチベーション高く取り組むことができました。海外研修で、シカゴ行ったんですけど、レストランのインターンってまだあります？

―ないです。レストランのインターンってどんな内容なんですか？

僕の場合は、レストランに日本人のシェフの方がいらっちゃって、三日間ぐらい面倒見てくれて。最終日に、日本のレストランとアメリカのそのレストランの違いが何かみたいなのを英語でプレゼンするみたいなのとやって、すごい楽しかったんですよね。

海外研修の小話

まだ森園先生いますよね？

―いらっちゃいます。でも全然関わりなくて…。

シカゴの研修を森園先生と一緒に行って、めちゃくちゃ楽しかった

な。めっちゃ小さな話ですけど、僕、このシカゴ研修の前日にお腹壊して、伊丹に前乗りだったけど、お腹下したまんま飛行機乗った。飛行機って気圧が変わるからすごいお腹に刺激で、もうシカゴついた瞬間、絶不調でした。本当に二日、三日絶食してた中で、シーフードレストランでインターンに行った。そこで初めて生牡蠣、オイスターとか食べて、めちゃくちゃうまかったー。回復したてで、ホームステイ先の食事も合わない時に、このシーフードレストランで、日本人シェフの人がご馳走してくれて、人生で一番うまかった飯がここでしたっていう話。

―すごい。日本人シェフのレストランいいですね。

英語好きだった他の理由として、カナダ人の留学生をお家で預かってたんですよ。三ヶ月預かってたんですけど。だから、そういうこともあって、すごい英語は好きで、なんか将来、英語使って仕事したいなとかおぼろげに思っていました。

学生時代の性格

―どんな生徒でしたか？

なんか僕は体育会バキバキではなかったんで、アメフト部とかサッカー部の子みたいに、めちゃくちゃリーダーシップがありますとか、そういうタイプでは元々なくて、クラスの中でバランス取ってくムードメーカー的なタイプだったんかなって思います。ただ、別にそのグループだけに固まって自分がいるってわけじゃなくて、いわゆる陽キヤの子のグループもいるし、陰キヤの子にもめちゃくちゃ仲いいし、みたいなタイプでした。勉強は文系でそこそのレベルで国際経営学科にギリ滑り込めたぐらい。まあ、盛り上げるけど授業はちゃんと聞くような、先生からしたら便利なタイプでした（笑）。

文化祭での思い出

―高校時代の思い出の話ありますか？

一番の思い出は、三年生の時の文化祭。プロジェクト長（以下「プロ長」）をして、クラスのみんなと一緒に最優秀賞取れたことかなあ。多分知らないと思うんですけど、「セブンティーン・アゲイン」っていうアメリカの映画があつて、それを演劇で披露したのが一番の思い出です。

―どんな内容なんですか？

四〇歳ぐらいになったおじさんが十七歳に生まれ変わって、青春取り戻そうみたいな話ですね。よければ多分アマゾン・プライムとかで見れると思うんで見てみてください。三年生のあすなる祭はまだ市民ホールで劇なんですか？

―はい。そうです。

まだ一緒なんだ（笑）。「セブンティーン・アゲイン」で、プロ長になったんですけど、そもそもプロ長をめちゃくちゃしたかったかって言うのと全然そうじゃなかった。半ば強引に押し付けられたみたいな感じの始まりだったんですよ。

―え、強引に？それはどんな感じだったんですか？

一、二年生の時の文化祭の時も、なんか役者、演者とかリーダーじゃなくて、割と裏方のスタッフに回ってて。そういう時、あんまり前に出ないタイプっていうか、授業中とかは結構面白おかしく喋ってたんですけど、親来るし恥ずかしいなと思って（笑）。あんまりそういう時、前出なかったんですけど、「プロ長、誰やるんやろ？」みたいな話し合いありましたよね（笑）。その時に、「誰する？」みたいになって、一人の

クラスメイトの子が「勝部やればいいじゃん」みたいなことを言われて、周りも「そうだ、そうだ」ってなって、半ば強引に押し付けられて、みたいな。

―でも、実際任された時はどう思いました？

やるからにはちゃんとしたなと思った。演劇でどんな作品しようか決める時に、プロ長だし、みんなとたまたまキャラ的にも仲いいから、アンケート作ろうと思つて。手書きでアンケート作って、クラスのみん

な一人一人に配りました。

―手書きのアンケートってどんな内容だったんですか？

ただ単にアンケートじゃなくて、なんか一人一人の個性とか考えて作つた。例えば、音声さんとか役者さんとか、文化祭のどの分野、どういふところが向いてるかなと思ひ、考へて、こゝういふ分野で力貸してほしひとか、頼りたい、助けてほしひみたいなメッセーじも書いて、一人一人にこだわつたんですよ。目立ちたがり屋の子だったりしたら、ぜひ演者してほしひみたいな、こゝういふところすぐ活かせると思ひとか。状況判断すごい得意な子だったりすると、器用だし、音声とか美術とか色々してほしひみたいなことをコメントかけながらやつたりしてて。

―そのアンケートのクラスの反応はどうですか？

その最初の段階で、なんかみんなの心掴めたつていふか、めっちゃやる気あるじゃん。いいもの作ろうぜ。みたいな感じの雰囲気できた。それで、最初の動きとして間違わずにやれてよかったなつて思つてます。結構早い段階でクラスの士気が上がつてくれたから、やつてよかったなつて思ひました。

―すごい。一年生とか二年生の時も劇でしたか？

一年生の時は、ムービー。十五分か三〇分かのムービーをクラスで放映するみたい。二年生の時は、クラスの中で演劇。三年生が市民ホール。

—いやすごいです。三年間も劇をやってた。今の立守は、一、二年は普通にクラスで、お化け屋敷とかの出し物で、劇をやるのが最初で最後なんです。よ、三年は。だからもう、結構先輩たちの劇なら見てきてるけど、いざ自分たちがやるってなったら未知だなんて思ってます（笑）。

—そうか。一、二年生。今は違うんだ。いつからそうなるんだろ。三年間通してなんかみんな演者してて、一年の時に主役やってたやつとかはもう二年三年とずっと全部劇で役者やらされる。

—そうですね（笑）。最初がやってたなら今年もやってよってなりますよね。

—そうそうそう。で、なんでこの「セブンティーン・アゲイン」っていうやつにしたかっていうと、隣のクラスが一組、僕二組で。ずっと二組だったんですけど、一組のAくんっていう、めっちゃイケイケのプロ長がいて、その子が、アニーやるらしいぞって聞いて。一組の子って、バントワリング部もいるし、吹奏楽部めっちゃいるから、もうその二つフル活用してガチミュージカルするらしいっていうのを小耳に挟んで（笑）。じゃあどうしようかなって思った時に、太刀打ちできない、正面から戦っても多分勝てないだろうって思った。うちの二組は学年のお笑い担当みたいなのがいっぱい集まって、みんなが楽しくするのが一番いい劇ができそうだし、みんなも楽しんで取り組める方がいいじゃんって思ったからコメディにした。

—この「セブンティーン・アゲイン」ってやつは、たまたまクラスの子がアンケートでしたいって言うてくれたんで、それを選びました。本当

に、クラスすごい一体感持って取り組んでくれたんで、なぜ勝てたか未知だにわかんないけど、一番楽しそうにしてたクラスだったかなっていうことかもしれないけど、最優秀賞もらいました。めっちゃ嬉しかったです。やっぱりこの文化祭の経験、プロ長の経験がすごい今の仕事に生かされてるっていうか、今の仕事に就いたきっかけでもあるし、すごい思い出深いことでした。

将来の夢

—高校時代どんな夢を持っていましたか？

—僕の実家がおじいちゃん、おばあさんの代から日本料理屋さんやって、親父が二代目だったこともあって、ゆくゆくは三代目として、後継がなきゃなっていう風に思ってた。英語も好きだったし、海外に興味あったんで、海外で、自分の実家の料理屋さん出店できたらカッコいいなとか思ってた。それで、海外研修でシカゴ行った時も、その現地の日本料理屋さんでインターンさせてもらったりとかして、「あ、カッコいいな、みたいな、そんなのしたいってずっと思ってた」。

—めっちゃピタリですね、シカゴの研修で。すごいですね。

—だから、結構その日本料理屋さんのインターンの応募枠って決まってる、だけど、その中でいろんな人のどこに行きたいか志望理由とか見て先生が割り振るみたいな感じだったんですけど、やっぱり僕がドンピシャだからそのまま入れてくれるかなと思って、実際に入れてくれたっていう感じでした。

高校生活を共にした友達と貴重な留学の経験

—高校時代に仲良かった友達と今も関係とか続いていますか？

大学の学部が一緒だった子が仲良いかな。あとは、高校から一緒だった子は今でも仲良かったりする子は多いかな。今、住んでいる家の最寄駅挟んで、向かいの違う出口の方に大学の友達が住んでる(笑)。

でも、やっぱり高校のグループでずっと仲いい人たちもいれば、僕はどっちかっていうと大学のグループで仲いいかな。東京と一緒に出てきて、東京で遊ぶみたいなのがあたりして、関西に残ったままの子たちとかだと、大学と高校も含めみんなグループ固まったりとかは多いんですけど、やっぱり東京出てきちゃうと結構、交流が減ったりってのが正直あったりします。でも、絶対高校の友達も大事にした方がいいな。

―河内寛太っていう人知っていますか？

同級生。俺、カナダに高校三年生の一、二、三月、ちょうど大学入学する手前で、カナダのUBCに三ヶ月だけ留学してた時に、河内寛太と一緒にいった(笑)。

―去年まで立守の体育の先生やってたんですよ。

え、そうなの。寛太今何してるんだろう。留学と一緒に三ヶ月間行って、めっちゃくちや仲良く過ごしたけど、結局、学部違って。あんまりやりとりもしなくなってる。写真いっぱいある。懐かしい。一緒に、めっちゃカナダのスキー場とか行ったのに。今やり取りしよって言われたら何喋ろっか(笑)。

―えーすごい。めっちゃ仲良いですね。

UBCの留学制度はまだ残ってますか？

―全然知らないです(笑)。あるんかなー。

たまたま、高校の時、家で留学生のタイラくんを預かってた。バンクーバーから七時間ぐらい離れた、同じブリティッシュコロンビア州っていうところに家があつて。自分がカナダに留学してた三ヶ月間で、一回

だけ、その子のところに、カナダの深夜バス七時間乗って、高校生一人で会いに行った。タイラくんも、なんか日本をすごい気に入ってくれて。

今、千葉に住んで。こっちで、インド人の奥さんと結婚して、子供いて。まだ交流あるんだよね。高二か高三の三ヶ月間だけじゃなくて、ちょこちょこうちに何回も遊びに来てくれて。タイラくんは、大学は千葉の大学に入学して、ずっと今でも交流あるみたいな感じ。

―えー今でも交流あるなんてすごいですね。

留学しないんですか？ 榎さん。

―したかったですけど、なんかもうタイミング逃したって感じで、やっぱり大学生になってからしたいなって感じです。

やる気さえあれば。いやほんとに、僕もカナダ高三の三ヶ月間行ってたし。で、大学卒業したら海外の日本料理店で働きたいやと思って、留学はしなかったんですよ、大学時代。けどやっぱり、今振り返ると大学時代に留学しときやよかったなってめっちゃ思います。留学考えるなら早め早めに考えといた方がいいかもしれないです。っていう勝手なアドバイスです(笑)。

―留学行ってた人って周り結構いました？

めっちゃいました。国際系学科だったので。国際系の学科だったからもうほぼみんなするみたいなの。逆に「勝部行かないの？」みたいな感じ。いや、俺高校の時行ってるし。って思ってたけど、今振り返ると行つときやよかったっていうのはめっちゃやと思います。英語喋れる、喋れないとやっぱり就活の時も全然違う。会社入ってから全然違うし、やっぱり思い出としてもいいものだから。ただ、物価高だからなかなか

か親御さんをお願いするって感じにはなるかもしれないですけど。とはいえ、いい経験なんで留学はめっちゃおすすめです。

―留学行ったら学年ずれますか？

ずれてる子もいます。だから今、会社でも年は一緒だけど年次は一個下みたいな子が僕に敬語使ってくる。でも正規のルートで行けば、単位の交流、交換？が大学なら、単位も立命館の単位として認めますみたいな制度もあったりするんで。本当に一、二年の早い段階で正規の留学に入れば、一年ダブったりはしなかつたりしますよ。一番ややこしいのは、就活始まった後で、ちよつとやっぱ就活間に合わないかもっていつて、留学一年行つて、就職ずらししていくみたいな子たちがいる。お金もかかるし、社会人年次も一個下がるし、っていうので、やっぱ行くんだったら早めです。

―なるほど、なるほど。

まだ早いかもしれないですけど。あとは親御さんと相談(笑)。カナダはおすすめです。エリアによるけど、治安はいいし、人もいいし。

今の仕事について

―仕事の内容の「広告」について教えてください。

皆さんが毎日見てる広告って誰が作ってるんだろう。みたいなことで、身の回りに溢れている、あれっ、っていうところに一旦ちよつと目を向けてもらいたいんです。例えば、CMに人気アイドルが出てる、カッブヌードルだと最近CANDYTUNEとか出てたり、吉田沙保里さんが出てたりします。

―確かに。よく見ます！他にも身近な例はありますか？

ありますよ。今、関西で大量発生しているであろうマスコットミヤクミヤクのポスター、電車のポスターだったり、街中とかの。それこそ大阪とか京都とか歩いたらいっぱいいますよね。あと、自分が見たかと思ってる動画の前に流れてくる動画だったとか。あとは、大人になつたらいつか買いたいなとつい憧れちゃう雑誌のあのページですかね。

―なるほど。身近な広告は全部広告代理店が関わっているんですか？

そうなんです。実は仕掛け人が広告代理店です。なるほど、なるほどつてなっちゃうと思うんですよ。なんとなくイメージはできるけど、ちよつとイメージ掴みきれないかなと思うんで、より具体的にお話できればなと思っていて。

―広告代理店って実際にどんな仕事をする会社なんですか？

一言で言うと、広告代理店っていうのは、広告で商品だったり、あとはサービスを宣伝したいお客様、いわゆる企業だったり、地方自治体とかで、政府とかもいろんなお客さんがいます。その夢を叶えるプロ集団みたいな感じで思ってもらえるかなと。

例えば、飲料メーカーさんの悩みがありました。「スポーツドリンクを高校生にバズらせたい。でも、どうすればいいんでしょう」みたいな悩みがあった時に、広告代理店の出番です。クライアントの悩みを聞きに行つて、世の中の流行を分析しながら、心に響く広告を考えて、実行まで導きます。これが広告の仕事です。

影響を受けたCM

―実際に印象に残っている広告ってありますか？

僕が、本当に広告代理店を目指す時とかにいいなって思ったCMです。めっちゃくちゃ好きな僕の広告で。滋賀県出身の八木莉可子さんを起

用したポカリスエットのCMです。これが多分七年前ぐらいで、二〇一八年ぐらいにできたCMなんです。

「ポカリのCM！見たことあります。当時どんな流行があったんですか？」

多分「HITON」が流行り始める二、三年ぐらい前で、一、三人で踊るダンスの動画とか流行っていたりしたんです。そういうダンスよりも、全校生徒が集まって踊ってるみたいなのを表現していて。本当に純度の高い青春というか、青春の刹那的なところも含めてうまく表現しています。

「どんなメッセージが込められていたんですか？」

その動画の中でも、「自分の潜在能力ってこんなもんじゃないよ」みたいなこともキャッチコピーの中で言っていたりして。「潜在能力を引き出す。」だったりとか、こういうビジュアルで、最後のプールのところで整列してるのをとって、「自分はきつと想像以上だった。」

こういうコピーを出して、このダンス動画で高校生の間でバズらせましょう。みたいな。めっちゃくちや好きだし、なんかそういう目線でCM見てると楽しかったりして。これが二〇二〇年のポカリのCM。ちょうどコロナ禍になっていた時。

「コロナ禍になってから変化があったんですか？」

そうです。僕がすごい好きなポイントとして、このキャッチコピーの「乾きを力に変えていく」っていうもの。やっぱりコロナ禍っていう環境、抑圧されたというか、制限がある環境っていうところを、「乾き」っていう言葉に変えていて。かつ、コロナ禍っていう乾きもあれば、青春っていう、なんかもがいてる、自分の行きたいところはどこだろうみたいなところもわからない中で、なんかもがき苦しんでるところをこの

「青春としての乾き」みたいに、すごくうまく表現できてるキャッチコピーだなと思いますね。

「なるほど。当時の高校生の気持ちにも重なりますね。」

そういった、企業が悩んでいること、高校生の中でバズらしたいみたいなことがある中で、動画であったりだとか、ビジュアル、ポスターであったりだとかうまく表現をして、良いイメージを持ってもらうということを、表現とかで形にしていってというのが広告代理店の仕事です。僕もいつかこういうカッコいいCM作りたいとは思っています。

「いいですね。じゃあ、インタビューは以上です。ありがとうございました。」

ありがとうございました。

【感想】

立守が昔と変わったところや変わってないことを勝部さんのお話と共に聞くことができて、とても楽しかった。高校生活のことだけでなく、大学時代の話、今の仕事に就くことになったきっかけまでたくさん聞けて自分のこれからの活かすことができる話を聞くことができた。立守で高校生活を送ったということですが共通点がない中で、聞き書きというものを通じて出会えて、人生について話を聞いて、とても貴重な時間だった。

(次ページへ)



語り手：勝部光貴さん
右上：聞き手 槇優花